

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02094

研究課題名（和文）幼児期における人間関係形成と家族の社会関係資本の構築

研究課題名（英文）Human Relation in Early Childhood and Family Social Capital

研究代表者

石川 由香里（Ishikawa, Yukari）

立正大学・文学部・教授

研究者番号：80280270

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、子育てを通じて形成される親の社会関係資本には階級流動性が見られるのではないかと仮説のもと、子育てを通じて得た親のネットワークが子どもとは直接関わらない場面でもどのように利用されているのかを明らかにすることである。当初の予定であった参与観察とインタビュー調査に加え、質問紙調査を実施した。

家族規模の縮小のなか、孤立感・孤独感を緩和するうえで、ママ友の人数が多いことはプラスに働く。階層要因については、ママ友の数は学歴とは逆の関連が見られた一方で、個人的な相談という質の部分では、学歴の高い母親において活用される傾向がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

パンデミックを経験することで子どもを通じたつながりが、子育ての孤立化を防ぐために重要であることが改めて確認できた。他者に積極的にアプローチする人ほどネットワークを築きやすいことから、いかに人と人の関係を繋いでいくかが支援する側の課題と言える。また作られるネットワーク規模には階層要因は関わりが見られなかった一方で、子どもの教育に関しては高階層において活用されがちであった。したがって、親世代の間では階層横断的でありながら、子世代への影響については階層再生産的な働きをする可能性があるといえる。

研究成果の概要（英文）：This study was to hypothesize that there may be class fluidity in the social capital of parents formed through child-rearing, and the purpose of this study was to clarify how it is being used. I was planned the originally participant observation and interview survey, Because the coronavirus pandemic has made this difficult, we added a questionnaire survey.

With family sizes shrinking, having a large number of mom friends is a positive factor in alleviating feelings of isolation and loneliness. There is no direct relationship between the number of mom friends and enrollment after the pandemic, and mothers themselves should approach others in order to increase the number of mom friends. The key was to do so. Regarding class factors, while the number of mom friends was inversely related to educational background, the quality of personal consultation was more likely to be used by mothers with higher educational backgrounds.

研究分野：社会学

キーワード：子育て 社会関係資本 階層 コロナ禍

### 1. 研究開始当初の背景

子育てと社会関係資本の関連については、親がどのような社会関係資本を保持している(していない)ことが、子育てそのものにおいて有利(不利)に働くのか、といういわば子どもへの影響を終着点とした観点から論じられる傾向にある。しかし、子育てを通じて得た社会関係資本とは、子育てという事柄を離れて、親自身にとって役立てられるという、逆の側面もあると考える。その際、ブルデューの理論においては、社会関係資本とは文化資本の転化したものであり、階層再生産に資するものであると考えられていたのに対し、幼少期の子ども同士の関係性とは階層を前提としない付き合いであることが想定可能であり、親同士においても階層を超えた関係性構築が可能ではないかと考えた。したがって子どもを通じることで、階層を超えた社会関係資本形成がなされ、そのことが階層流動性を生むのではないかとの問題関心から、研究計画を企図した。

### 2. 研究の目的

本研究は、幼児期に形成される子ども同士の人間関係が、その保護者の社会関係資本として利用される可能性について明らかにしようとするものである。パットナムによれば、社会関係資本はネットワーク、互酬性の規範、一般的信頼からなると定義されている。したがってまず、子どもが友人として選好する相手、その頻度といったネットワークを明らかにすることを試みる。そして仲間意識といえるものがどのくらいはっきりとみられるのか、規範の形成について観察する。そしてそのことが、一般的信頼につながっているのかについてもあわせてみていく。さらにそうした子どもたちの関係性が、親同士の関係性につながっているのか、それとも親同士のつながりは作られないままなのか、そうだとすれば何が阻害要因となっているのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

研究の初年度には、子ども一人ひとりについての把握と仲間づくりの様子を知ることが目的として、協力の得られた幼保連携型認定子ども園において週1回、定期的に参与観察を行った。また、園で実施される運動会、お遊戯会といった行事には保護者の参加が促されることから、その観察を通じて、保護者同士のみならず、卒園生や地元の人々の関係性についても観察した。

しかし研究に入って2年度はじめに新型コロナウイルス感染症が広がり、参与観察については中断せざるを得なかった。また当該園の保護者に対するインタビュー調査もオンラインでの実施を試みたものの困難であった。同時にそのことは、コロナ禍が子育てをする人々のつながりにもたらした影響についても考慮する必要を喚起させた。そこで調査対象を広げ、長崎市内の公立保育所並びにこども園7か所と、私立保育所6か所をお願いし、保護者への調査票調査を実施させていただいた。

研究の3年度目には、研究者自身が異動することとなり長崎を離れることになったため、参与観察については再開できなかったが、前年度に行った調査の分析を続けた。さらに地域移動が可能となったことから、コロナ禍以前に実施したインタビューのインフォーマント2名に再び連絡をとり、その後の親同士、地域の人々との関係性についてのインタビュー調査を年度を跨いで実施した。彼女らはともに、地域をつなぐキーパーソンとなっていた共通点を持つが、地元出身であるか否かに違いがあり、そのことがもたらす影響を知るためである。

### 4. 研究成果

参与観察においては、保護者同士のやり取りを観察する機会は少なかったものの、保護者参加が求められる行事の際に交流する様子が観察できた。同時に行事は地域の育成会や町内会によって支えられており、そのメンバーには当該園の卒園者が多く含まれているなど、保育所を仲立ちとすることで、長期にわたる社会関係資本として活用されている様子を観察することができた。地方都市において行事が開催されることは、世代を超えた形で人々の絆を育てる上で大きな役割を果たしていることが改めて確認できた。

当初予定していなかった調査票調査を実施することで、パンデミックが子育てに与えた影響についても知見を得ることができた。調査票の回収数は361票、回収率は38.1%であった。調査結果からは、予測されたことであるものの、やはりコロナ禍にあっては保護者同士が関わること自体が困難となっており、つながりの希薄化が進んでいることが浮かび上がってきた。また10年前に行った調査と比較すると、町内会、近隣等地域社会とのつながりが非常に弱くなっていることもわかった。その一方で、他の保護者と親しくなるきっかけとして、子ども同士の仲が良い、きょうだいと同じ年齢といった項目があてはまるとする回答が多く、保護者の社会関係資本の構築において子どもの持つ重要性を改めて浮き彫りにすることができた。

インタビュー調査からは、ともにネットワークの中心にいた人のうち、他の地域から流入した人は子どもの年齢が上がるにつれ、母親ネットワークの中から離れ、地域全体としても世代を超

えた関係づくりが壊滅的な状況であることが語られていた一方で、その土地に生まれ住んだ人からは、コロナ禍にあっても付き合いにあまり影響がなく、ここでも地縁の持つ力の強さが浮き彫りとなった。

研究の目的に、子どもを経由することで階層から離れた親同士のつながりが作られる可能性を探ることがあった。子どもを通じたネットワークの大きさに階層差はなかったが、その使われ方の違いを見ると、階層再生産につながる可能性が見えてきた。

#### 今後の展望

インタビューで得られたデータの分析が不十分であり、とくにパンデミックのような危機を乗り越え、地域にネットワークが長期間にわたり、根付くのはどのような状況であるのか、今後さらに検討をしたいと考えている。また、調査票データとインタビュー調査とを結びつけた分析についても、今後進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石川由香里	4. 巻 39
2. 論文標題 子どもを通じての母親の社会関係資本の形成	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立正大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 121 137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川由香里	4. 巻 64
2. 論文標題 幼児期におけるルール取得の2つの水準	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 活水論文集	6. 最初と最後の頁 143 - 155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Ishikawa Yukari
2. 発表標題 Relation of Sex education, sexual behavior and gender norm
3. 学会等名 ICAS（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 林雄亮・石川由香里・加藤秀一編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 250
3. 書名 若者の性の現在地	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------